

<講演抄録>4. 顎下部に発生した類皮嚢胞の一例(第18回東北大学歯学会講演抄録)(一般演題)

著者	成田 憲司, 山口 泰, 原 敬, 渡辺 友和, 熊谷 正浩, 飯野 光喜, 松田 耕策, 越後 成志, 手島 貞一
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	10
号	1
ページ	51-51
発行年	1991-06-29
URL	http://hdl.handle.net/10097/31379

・口腔所見：上唇が薄い。上唇の中央部が上顎歯肉部に直接付着しており，口腔前庭が狭い。下顎前歯部には多数の小帯が存在している。

$\frac{BA|AB}{BA|AB}$ は先天的に欠如し，その部分の歯肉は凹凸不整である。現存乳歯はすべて小さく，乳犬歯は栓状歯，乳臼歯は蕾状である。Eでは，頬側遠心に結節が認められる。E，Eに軽度の裂溝齲蝕がある。上下顎共に，歯列弓幅径は狭小で，下顎歯列弓は，V字型である。

・X線所見：下顎骨正中部に癒合不全，上下顎乳前歯先欠部の歯槽骨縁の不規則な形態を認める。D，D，Eが単根歯，Eは，タウロドントである。 $\frac{2}{2} \frac{1}{1} \frac{1}{1} \frac{2}{2}$ は，先天的に欠如している。 $\frac{6}{7} \frac{4}{6} \frac{4}{3} \frac{5}{4} \frac{6}{6}$ で歯胚が確認されたが，石灰化は遅延している。

4. 顎下部に発生した類皮嚢胞の一例

○成田憲司，山口 泰，原 敬，渡辺友和，熊谷正浩，飯野光喜，松田耕策，越後成志，手島貞一（口腔外科 2）

類皮嚢胞および類表皮嚢胞は，胎生期における外胚葉迷入，あるいは外傷や炎症などによる上皮組織の迷入に由来するとされ，顎口腔領域における本嚢胞の好発部位は口底部，顎下部，オトガイ部といわれる。今回当科では顎下部からオトガイ部におよぶ大きな類皮嚢胞の一例を経験した。

患者：17歳，男性。主訴：左側顎下部腫脹。現病歴：2年前より左側顎下部のび慢性の腫脹に気づくも，痛みなどの症状がないため放置。その頃より吐き気が発現。その後，腫脹は徐々に増大し，1990年7月12日当科受診。左側顎下部から正中線をやや越えた部位に55×32 mm大の境界不明瞭な腫脹を認めた。口腔内は2-7口底部に膨隆が見られた。口腔外より試験穿刺したところ，白色で豆腐粕状の内容物を吸引。CT写真では嚢胞様の像と舌骨がこれに圧迫されている像が認められた。

類表皮嚢胞の臨床診断のもとに，10月3日全身麻酔下で嚢胞摘出術を施行。口腔内から摘出を試みるも嚢胞は顎舌骨筋下部にあると思われ，前方と後方を剝離できなかったため，正中オトガイ下部より左側下顎角部にわたって皮膚切開し，顎下三角部の深頸筋膜を切開して嚢胞を露出させた。嚢胞壁は一部が顎舌骨筋およびオトガイ舌筋と癒着していたが，傷つけず一塊として摘出した。摘出物は大きさ77×45×35 mm，重さ

64 gの柔軟な長形球状物で，表面は黄白色で血管の走行が認められた。内容物は黄色豆腐粕状で毛髪や爪などは認められなかった。病理組織学的には，嚢胞腔に角化物を含み，嚢胞壁は角化重層扁平上皮と皮脂腺を含んだ線維性結合組織より成り，類皮嚢胞と診断された。術後，吐き気は軽減し，経過は良好である。

5. 陶材の強度に関する基礎的検討——ラミネートベニア用陶材について——

○毛取達郎，依田正信，木村幸平（歯科補綴 1）

ラミネートベニア修復法は，審美性に対する患者の関心の高まり，接着技術の向上，その他の多くの長所から，近年再び注目され臨床応用されている。しかし長所の1つである歯質の削除量が少ないということ故に，修復物自体の厚さが非常に薄くなりやすいこと，陶材そのものが衝撃力に弱いということから，技工操作過程，試適時，及び口腔内装着時に破折の危険性が高く，また経時的耐久性にも不安がある。そこで今回我々はラミネートベニア用陶材自体の機械的強度，特に曲げ強度について調べてみた。

実験に用いたラミネートベニア用陶材は高強度ポーセレンのオブテック HSP，ラミネート専用ポーセレンのコスモテックポーセレン，クラパールポーセレン，焼付用ポーセレンのユニボンドヴィンテージトランスルーセント，ユニボンドヴィンテージオパール陶材の5種類を用い，板状に焼成した試料（厚さ1.0 mm，幅8.0 mm，長さ18 mm）を，支点間距離13.5 mmで3点曲げ試験を行った。試料の数は各々5個ずつとした。

その結果オブテック HSP の曲げ強さの平均値は，13.4 kgf/mm²となり，他の4種類の陶材の曲げ強さの平均値は，いずれも8.0～8.3 kgf/mm²であり，高強度ポーセレンであるオブテック HSP が，他のラミネートベニア用陶材に比べて約60%強い値を示した。

ラミネートベニアは0.5～0.8 mmとかなり薄くならざるを得ないことや，咬合に関与する症例に応用されることも考えられるため，陶材自体の強度はできるだけ強いことが望まれる。今回の実験の結果からみると，高強度ポーセレンは，曲げ強度の点で優れていると考えられる。